ドイツ商業教育制度の成立過程

（その2）

田　中　昭　徳

はしがき
Ⅰ　重商主義時代における商業教育制度の発生
Ⅱ　ドイツ重商主義の「商業蔑視」と，商業教育運動の創始者 P. J. マルペルガー
1.　ドイツ重商主義の特質とその「商業蔑視」の傾向
（以上，前号）
2.「ドイツ最初の商業学者」P. J. マルペルガー
3.　P. J. マルペルガーの「商業アカデミー」設置の構想と商業教育教育運動の開始
（以上，本号）

2.「ドイツ最初の商業学者」P. J. マルペルガー

パウル・ヤコープ・マルペルガー（Paul Jakob Marperger, 1656–1730）は，商学史上，「ドイツ最初の商業学者」と目されている。[(1)] E. ウェーバーや J. レッフェルホルツなどによって指摘されているように，彼以前のドイツには，商業算術および簿記に関する著作はかなり古くからあった[(2)]けれども，商業全般にわたる研究は未だなく，ただ僅かに商業に関する諸種の手記が存在したにすぎなかった。[(3)] いうまでもなく，いわゆる前期カメラリストたち，たとえば M. v. オッセ（Melchior von Osse, 1506–57），G. v. オープレヒト（Georg von Obrecht, 1547–1612），J. J. ベッヒャー（Johann Joachim Becher, 1625–82），P. W. v. ホルニック（Phillipp Wilhelm von Hornigk, 1638–1712），W. シュレーダー（Wilhelm Schröder, 1640–88），V. L. v. ゼッ

ケンドルフ (Veit Ludwig von Seckendorff, 1626–92) らもまた，それぞれ商業について論じてはいる。[4] しかし，それらはいずれも商業に関する純粋な研究ではなく，富国策あるいは家政＝行政論を展開した各自の著作や論策のなかでただ付随的に言及されたものにすぎない。しかも注目すべきことには，われわれがすでに前稿で予め考察しておいたように，かれらは，西欧先進諸国の場合と同じく重商主義的富強を目的としながら，国民的視野に欠け，もっぱら領邦君主の官憲的な行政活動による「上から」の農・手工業の保護育成を基調として国庫の充実を図ろうとし，商業にたいしては消極的な意義しか認めず，むしろこれを「蔑視」する傾向をすらもっていたのである。そして，同様のことはさらに，マルペルガーと同時代の J. G. ライプ (Johann Georg Leib, 1670–1727), T. L. ラウ (Theodor Ludwig Lau, 1670–40), J. B. ロール (Julius Berhard Rohr, 1683/88–1742), S. P. ガッサー (Simon Peter Gasser, 1676–1745), J. Ch. ディートマール (Justus Christoph Dithmar, 1677–1737) などの，いわゆる後期カメラリストたちについてもいい得るであろう。なるほど，かれらは前期カメラリストに比して，私経済＝租税政策的見地から商業について幾分詳細な考察を加わえている。[5] しかし，その考察は前期カメラリストの場合とまったく同様，商業そのものについての研究ではなく，またその商業にたいする感覚もほとんど同一であって，したがって加田哲二氏の指摘しているように，[6] かれらは本来「行政学発達の先駆者として」見なされるべきであろう。これに反して，マルペルガーは国民経済における商業の意義と役割とを認識したドイツ最初の人物であり，W. ロッシャーの引用を借りるならば〈fast den einzigen deutschen Handelsschriftsteller〉[7] であった。このマルペルガーによって初めて，ドイツでは簿記会計・商業通信・銀行・取引所・市場・商法・商業地理・商業史・商業道徳など商業諸般の本格的研究が行なわれるようになったのであり，ここに本来のドイツ商業学が始まるのである。われわれはこの際，ドイツ「商業学」体系の組織者と称される C. G. ルドヴィッチ (Carl Günther Ludovici, 1707–

1778）がその「商業学」体系を構築するに当って，かのサヴァリ（Jacaues Savary, 1662–90）にならんでこのマルペルガーの諸研究を資料とし，それを集大成した[8]ことを改めて想起すべきであろう。

マルペルガーは1656年，ドイツ古来の商都ニュールンベルク[9]に生まれた。彼は生地のギムナジウムに入学後，神学の研究[10]に志したが，それが自己の性情に適さないのを認め，かたがた父のすすめもあってこれを中断し，商業について学ぶべく，当時ヴェニスに代って新たにヨーロッパにおける商業の一大中心地となりつつあったリヨンに赴いた。以後，彼はさらにジュネーブ，ハンブルク，リューベック，モスクワ，ペテルスブルク，ストックホルム，ウィーンなどのヨーロッパ各地を遍歴して商業について見聞し，あるいはみずから商業を営むなどしてその経験と見識を広め深めた。そして彼は，こうした経験と見識を基に，とくに1701年，«*Probirstein der Buchhalter*, 1701»を著わしたのを契機として，以後商業に関する著述家となり商業学者へと成長して行ったのである。1708年，彼はライプニッツの主唱によって創設（1700年）されたベルリンの王立プロイセン科学協会（Kgl. Preußische Sozietät der Wissenschaften）——王立プロイセン科学アカデミーの前身——の会員に選ばれるという名誉に浴した。しかし，科学協会々員の多くはマルペルガーの加入を快く思わなかった。とくに，敬虔派神学者 D. E. ヤブロンスキー（Daniel Ernst Jablonski, 1660–1741）とグラウエン・クロスター・ギムナジウムの校長 J. L. フリッシュ（Johann Leonhard Frisch）とがその筆頭であった[11]。商業の研究などは学問のうちにはいらないというのが，かれらの反感の主たる原因であった。われわれはこの一事をもってしても，当時のドイツ学界において商業研究がいかなる眼で見られていたかを窺知することができよう。1712年，マルペルガーはドレスデン[12]より招聘されてポーランド王国＝ザクセン選帝侯国枢密顧問官兼商業顧問官（Königlich＝Polnischer und Kursächsischer Hof＝und Commerzienrath）に就任し，1730年死去するまでこの地にふみとどまって，商業に関する著述や研究に，

あるいは商業の振興に尽力した。[13]

マルペルガーは，W. ロッシュの記述するところによれば，[14]「驚ろくべき多作家（ein entsetzlicher Vielschreiber）であった。たとえば，彼は1717年に著わしたその著書《*Erstes Hundert gelehrter Kaufleute*》において1698年以来公刊した自著35冊の名を挙げており，そのほかになお，印刷に付す用意のできた著作物は71点にのぼった」と謂われる。これらの著述のほとんど大部分が商業に関するものであって，いまその主要なるものを列挙すれば次の通りである。

1）*Probirstein der Buchhalter oder selbst lehrende Buchhalter=Schule.* Ratzeburg 1701. 2. Auflage, Lübeck ? 1707.

2）*Neu=Eröffnete Kauffmans=Börse, worin Eine vollkommene Connoisance aller zu der Handlung dienenden Sachen und Merckwürdigkeiten, auch Curieusen und Reisenden Anleitung gegeben wird, was sie davon zu ihrem Vortheil auff Reisen zu bemercken.* Hamburg 1705. 2. Auflage, Hamburg 1707.

3）*Moscowitischer Kauffmann.* Lübeck 1705. u. 1723.

4）*Schwedischer Kauffmann.* Wismar 1706.

5）*Der allzeit fertige Handelscorrespondent, worinnen die gantze Handelswissenschaft mit deroselben Scripturen, Briefen und Cautelen, samt allerhand Arten Rechnungs=Formularen und andern Nothwendigkeiten enthalten, nach dem allerneuesten Stylo vornehmer Kaufleute eingerichtet.* Hamburg 1706. (od. 1705)

6）*Das Neu=Eröffnete Manufacturen=Hauß.* Hamburg 1707.

7）*Das in Natur=und Kunst=Sachen eröffnete Kauffmanns=Magazin.* Hamburg 1708.（この書は商品学辞典である）。

8）*Historischer Kauffmann.* Lübeck u. Leipzig 1708.

9）*Neu=Eröffnetes Handels=Gericht, oder wohlbestelltes Commercien=*

Collegium. Hamburg 1708 od. 1709.

10) *Historisch = mercatorische Beschreibung aller Preußischen Lande und Provintzien.* 1710.

11) *Ausführliche Beschreibung des Hanfs und Flachßes, und der daraus gefertigten Manufacturen.* 1710.

12) *Der russische Kauffmann.* 1710.

13) *Beschreibung der Messen und Jahr=Märckte.* Leipzig 1711.

14) *Schlesischer Kauffmann.* Breslau 1714.

15) *So nöthig als nützliche Fragen über die Kauffmannschafft.* Leipzig und Flensburg 1714. (Die erste Fortsetzung. 1715)

16) *Wohl=unterwiesener Kauffmanns=Junge und Getreuer und Geliebter Handelsdiener.* Nürnberg 1715.

17) *Getreuer und Geschickter Handels = Diener.* Nürnberg und Leipzig 1715. （この書は前書の続篇である。）

18) *Montes Pietatis, oder Leyh = Assistentz = und Hülffshäuser, Lehn = Banquen und Lombards.* Leipzig 1715.

19) *Ausführliche Beschreibung des Haar = und Feder=Handels.* Leipzig 1717.

20) *Erstes Hundert gelehrter Kauffleute.* 1717.

21) *Vorschlag von Verheyrathung der Töchter.* Hamburg 1717.

22) *Beschreibung der Banqven.* Halle und Leipzig 1717.

23) *Wohlmeynende Gedanken über die Versorgung der Armen.* nebst 3 Fortsetzungen. 1722.

24) *Plantagen=Tractat.* 1722.

25) *Neu=Eröffnete Wasserfahrt auf Flüßen und Canälen.* Dressden 1722.

26) *Der Geld=und Wechsel Cours=Zettul.* 1722.

27) *Beschreibung eines in Theurung eröffnenden Proviant=Hanßes.* 1722.

28) *Beschreibung des Tuchmacher=Handwercks.* 1723.

29) *Fragen über die Kauffmannschaft.* Leipzig 1724.

以上のほかに，見逃すことのできないマルペルガーの重要著作として，1723年に著わされた《*Terifolium Mercantile Aureum*》が挙げられなければならないであろう。この書は主として商業教育制度設置についての彼の構想を述べたものであり，われわれの考察のテーマに直接かかわりをもつので，次節でその内容をとくに詳しく検討する予定である。

マルペルガーをしてかくも無数の著述にかりたてたところのものは，1つには彼の明敏さであり，他には彼の俸給のひくいことであった。しかも，彼はその著作の大多数を自費出版せざるを得ず，そのためそれらはおうおう発行時や定価の記載なしに刊行されて，したがって，彼の死後間もなくそれらを捜し求めることはもはやまったく不可能となったのである——E. ウェーバーはマルペルガーの多作の事情をこのように説明している。(15)

いうまでもなく，マルペルガーの商業諸般に関する著述は，在来の研究によって明らかにされているように，そのすべてが必ずしも彼自身の独創的見解に基づいたものではなく，むしろその大部分は外国書，とりわけ J. サヴァリの『完全なる商人』の祖述，敷衍であった。この点に関し，R. ザイファルトは次のように評している。(16) „Der begabte und praktisch erfahrene aber undisziplinierte Marperger〔1656–1730〕konnte trotz der großen Zahl seiner handlungswissenschaftlichen Schriften nichts Entsprechendes neben den « Vollkommenen Kauff = und Handels = Mann » Savarys setzen“ と。そしてまた，マルペルガーの諸著作における叙述それ自体が，当時の慣習より以上に尊大ぶった煩わしい饒舌と浅薄さに陥っていたことも否定できない。この点について，W. ロッシャーとともに，(17) J. ヘラウァが鋭く批判しているは，人びとの周知するところである。(18) „Marpergers Bücher sind stark veraltet und muten uns heute mit ihrem wichtigtuenden und weitschweifigen Darlegungen selbstverständlichster Dinge oft geradezu

kindisch an."

しかし，われわれはマルペルガーのこうした欠点の故をもって，「ドイツ最初の商業学者」としての彼の業績を否定し去ることはできないであろう。むろん J. レッフェルホルツのように，„Daß er〔Marperger〕in seinen Ausführungen häufig sehr breit und weitschweifig, sehr altertümlich und kurios erscheint, ist sehr verständlich; denn dem deutschen Kauffmann waren die neue Denkweise und die neuen Probleme noch gänzlich fremd und unbekannt"[19] とマルペルガーを弁護することは多少行き過ぎの感を免れない。だが，E. ウェーバが正当にも指摘しているごとく[20]，マルペルガーの諸著作のうち，とりわけ《*Der allzeit fertige Handelscorrespondet*》は商業通信の分野において，《*Historischer Kauffmann*》は商業史の分野においてそれぞれドイツ最古の書であること，そして J. レッフェルホルツが綿密に考証しているように[21]，《*Beschreibung der Banqven*》はドイツにおける最初の体系的にして且つもっとも包括的な銀行論であり，さらに《*Beschreibung der Messen und Jahr=Märckte*》は J. サヴァリーの『完全なる商人』に依拠したものであるとはいえ，〈Handelskundlicher Teil〉ではサヴァリを遙かに越えていることなども，また事実である。すなわち，マルペルガーの「ドイツ最初の商業学者」としての業績は，世界から隔離され，西欧先進諸国よりも遙かに低い水準にあったドイツの商業にたいして，諸般の新しい実際的知識や方法を提示し，それらに基づく学理的な経営を示唆した点にある。なるほど，彼は系統的＝体系的な商業学の創始者たり得なかった。彼の謂う〈Handelswissenschaft〉の Wissenschaft とは，E. ウェーバーも指摘しているように[22]，知識領域を指称するに他ならないものであった。しかしそれにもかかわらず，彼は商業諸般に関する新しい実際的知識や方法を提供することによって，商業を「蔑視」したり，あるいはただ思弁的にのみ商業を論ぜんとする人びとを覚醒せしめた。マルペルガーの諸著作は以後，たんに緇利の争いに没頭することなく，多少とも商業経営の諸理論を学ばんとする実務家にとっ

ては欠くべからざるものとなったのである。[23]

注

(1) Eduard Weber, *Literaturgeschichte der Handelsbetriebslehre.* Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. hersg. von K. Büchner, Ergänzungsheft XLIX. Tübingen 1914. S. 38: Josef Löffelholz, *Geschichte der Betriebswirtschaft und der Betriebswirtschaftslehre. Altertum=Mittelalter=Neuzeit bis zu Beginn des 19. Jahrhunderts.* Stuttgart 1735. S. 231 f. なお，レッフェルホルツは，マルペルガーを「«近代ドイツ» の経営経済学に関する最初の著述家」(der erste betriebswirtschaftliche Schriftstller des „neuen Deutschland") あるいは「ドイツにおける «近代» 経営学文献の創始者」(der Begründer der „modernen" betriebswissenschaftlichen Literatur in Deutschland) として位置づけ，「のちほど，なかんずく J. G. ビュッシュと W. ロッシャーとは，まったく不当にも (sehr zu Unrecht)，彼とこの名誉ある地位を競わんと試みた」と付言している。また，邦語文献では，増地庸治郎著『経営経済学序論』，大正15年，同文館刊，32頁。: 桐田尚作著『商業学概論』，昭和26年，千倉書房刊，7頁。: 向井鹿松・福田敬太郎編集『体系商業学』，昭和33年，千倉書房刊，105頁。なお，佐々木吉郎著『経営経済学の成立』，昭和5年，厳松堂書店刊には，マルペルガーは「ドイツ最初の商業学者」であったとは明確に述べられていないが，«Handeswissenschaft» という名称を最初に用いたのはロイクス (Johann Michael Leuchs, 1763–1836) ではなくて，このマルペルガーであったということが諸所で強調されている。(参照，同上書，5頁注3，116頁注43など)。

(2) E. Weber, a. a. O., 23.; J. Löffelholz, a. a. O., S. 148–169.: 小倉金之助著『数学教育史』，昭和7年，岩波書店刊，30頁以下。: 増地庸治郎著，上掲書，32頁。: 佐々木吉郎著，上掲書，89頁。: 桐田尚作著，上掲書，7頁。: 向井・福田編集，上掲書，105頁。因みに，18世紀以前のドイツにおける商業算術および簿記に関する著作には，およそ下記のものがある。

[**Widmann, Johannes**], *Behende und hübsche Rechnung auf alle Kauffmannschafft.* Leipzig 1489, Pforzheim 1508.

Grammateus, Henricus (Heinrich Schreiber), *Ayn new kunstlich Buech welches gar gewiss vnd behend lernet .... mancherlay schöne vn zuwissen nottürftig rechnũg auff kauffmannschafft. Auch nach den proportion der kunst des gesanngs jm diatonischen geschlecht auss zutayln monochordnn / orgelpfeyffe vnn ander jnstrument .... Weytter ist hierjnnen begriffen bvech halten durch*

das Zornal / Kaps / vnd schuldbüch Visier zumachen durch den quadrad ..., 6 Tle., Nürnberg 1518.（この書は，前世紀末に公刊されたイタリアの著名なパチョーリ著『算術・幾何・比および比例全書』Lucas Pacioli, *Summa de Arithematica, Geometria, Proportioni et Proportionalita.* Venezia. 1494 に基づき，商業算術および簿記について補述したものである。参照，片岡義雄著『パチョーリ「簿記論」の研究』増訂版，昭和40年，森山書店刊，33–34 頁。）

Gottlieb, Johann, *Ein Teutsch verstendig Buchhalten für Herren oder Gesellschaffter inhalt wellischen process / desgleychen vorhin nie der jugent ist fürgetragen worden.* Ohne Ort, 1531.（参照，片岡義雄著，上掲書，34–35 頁。）

Elenbogoen, Erhart von, *Buchhalten auff Preussische müntze und gewicht.* Wittenberg 1537.

Gottlieb, Johann, *Zwey künstliche und verstendige Buchhalten.* 1546.

Schweicker, Wolffgang, *Zwifach Buchhalten, sampt seine Giornal / desselben Beschlus / auch Rechnung zuthun &c.* Nürnberg 1549.（この書はイタリア式複式簿記をドイツに導入したものである。参照，片岡義雄著，上掲書，35–36 頁。）

Kaltenbrünner, J., *Ein new gestellt künstlich Recherbuchlein / darinnen alle yetztgebreuchige Kauffmanns / auch andere Rechnungen / gantz klar und verstendtlich begriffen.* Nürnberg 1565.

Passchier=Goessen, *Bvchhalten fein kurtz zusamen gefasst vnd begriffen, nach arth vnd weise der Italianer, mit allerhandt verständlichen guten Exemplen von Factoryen, auch Geselschafft handlungen.* Hamburg 1594.

Ulm, W., *Ein Newes Rechen büchlein.* Augsburg 1596.

Schurtz, Georg Nikolaus, *General Instruction der Arithmetischen und Politischen Kunst der hochlöblichen Wissenschaft der Kauff= und Handelsleute des Buchhaltens.* ohne Ort 1662.（この書は，のちほど増補・改題されて 1695 年に《*Nutzbare Richtschnur der Löblichen Kauffmannschafft. Das ist; Neuvermehrtvollkommenes Buchhalten.* ohne Ort》として刊行された。）

(3) E. Weber, a. a. O., S. 37.: J. Löffelholz, a. a. O., S. 231.: 桐田尚作著，上掲書，7 頁。: 向井・福田編集，上掲書，105 頁。なお，18世紀以前のドイツにおける商業に関する手記および外国書の翻訳には，およそ下記のものがある。

Kuppenener, Christoph, *Consilia elegantissima in materia usurarum et contractuum usurariorum.* Leipzig 1508.（ドイツ語訳：*Ein schones Buchlein czu deutsch, daraus ein jegklicher mensche, wes standes er sey, lernen mag, was wucher und wucherische hendel seyn ....* Leipzig 1508).

Biel, Gabriel, *Tractatus de potestate & utilitate monetarū.* Oppenheim 1516. 〔一橋大学付属図書館所蔵，メンガー文庫。Inc. 6.〕

Luther, Martin, *Eyn Sermon von dem Wucher.* Wittenberg 1519. (小説教 kleine Sermon 版)

Luther, Martin, *Von Kauffshandlung und wucher.* Wittenberg 1524.

Camerarius, Joachim, *De tractandis equis, sive 'Ιππικοῦ's conversio libelli Xenophontis de re equestri in Latinum, Historiola rei nummariæ sive de nomismatis Geæcorum & Latinorum.* Tübingen 1539.

Luther, Martin, *An die Pfarrherrn, wider den Wucher zu predigen. Vermanung.* Wittenberg 1540.

Naogeorgus, Thomas, *Tragoedia alia nova. Mercator seu judicium, in qua in conspectum ponuntur apostolica et papistica doctorina ....* Augusburg? 1540.

Meder, Lorenz, *Handel Buch darin angezeigt wird, welcher gestalt inn den fürnembsten Handelstetten Europe. allerley wahren anfencklich kaufft, dieselbig wider mit nutz verkaufft, wie die wechsel gemacht, pfund, ellen, und muentz uberal verglichen, und zu welcher zeit die merckten gewoenlich gehalten werden. Sampt andern mehr nutzungen darzu gehörig. Allen Hanthieren und Jungen Kaufleuten ganz nützlich und diestlich.* Nürnberg und Ulrich 1558.

Faber, Heinrich, *Güldin Epistel Büchlein, der gleichen nit gesehen worden. Darinn allerhand Sendbrieff, die sich zwischen Leuten mittelmessigs Stands, und sonderlich dem Kauffleuthen, in täglicher Uebung nottdürftig zutragen möchten.* Köln 1565.

Friesen, Tilemann (Tilemannus, Frisius), *Muentz Spiegel, das ist Ein New vnd wol außgefuehrter Bericht von der Muentz .... In vier Bucher zusam̃en gefasst ....* Frankfurt an der Oder 1592.

Spangenberg, Cyriacus, *Ein nuetzlicher Tractat vom rechten Brauch und Mißbrauch der Muentze.* 1592.

Besold, Christoph, *Discussiones quaestionum aliquot de usuris et annuis reditibus.* Tübingen 1598.

Hippolytus a Collibus, *Incrementa vrbivm, sive de caussis magnitudinis vrbium .... liber unus nunc primum in lucem editus.* Hanau 1600.

Bornitz, Jakob, *De nummis in repub. percutiendis & conservandis libri duo. Ex systemate politico deprompti.* Hanau 1608.

Mariana, Juan de, *De monetæ mutatione.* (In: Tractatus vii. Köln 1609.)

Latherus von Husum, Hermann, *De censv, hoe est qvo medio, iure, arte & studio status cuiusque regni, reipub. vel ciuitatis censum suum seu reditus .... traditur, tractatvs nomico=politicvs tam legibvs scriptis, qvam dictis ....* Frankfurt am Main 1618.

Goldast, Melchior, *Catholicon rei monetariæ, sive leges monarchicæ generales de rebus nummariis et pecuniariis .... Accessit chronologia omnium auctorum qui de re monetaria tractatus instituerunt usque ad ....* Frankfurt am Main 1620.

Leuber, Benjamin, *Ein kurzer Tractat von der Münze ....* 2 Tle. 1 Tle., Jena 1623, 2 Tle., Halle 1624.

Besold, Christoph, *Recapitvlatio monetalivm qvæstionvm; qvatvor responsis ivris comprehense ....* Frankfurt am Main 1624.

Cellarius, Balthasar, *Disputatio politica de moneta, seu re numeraria. ....* Jena 1639.

Schultz, M. G., *Discurs und Rede der Edlen und in der gantzen Welt berühmten Mercanzy und Kauffmannschaft.* Hamburg 1642.

Piazza Universale: Das ist Allgemeiner Schauplatz, Marckt und zusammenkunfft aller Professionen. Frankfurt an Main 1659. （この書は，ガルゾーニ著『全職業の舞台』Garzoni, Tommaso, *La piazza universale di tutte le professioni del mondo.* 1585, Venezia. のドイツ訳である。）

Wagner, M., *Idea Mercanturae darinnen, was von der Kauf Leute Commercien, Credit und Glauben, Fallimenten oder Bankrotten, Wexeln und dessen Rechte, Protecten, Parère, Rescontrëen, Kaufmanns=Messen, assecurationen, Buchhalten, und Bilancieren, anzumerken und zu behalten, kurz jedoch eigentlich beschrieben wird: Jungen und annoch ungeübte Kaufleuten zum notwendigen unterricht.* Bremen 1661.

Marquart, Johann (Joannes Marquardus), *Tractatus politico=juridicus de jure mercatorum et Commerciorum singulari. Accesserunt ... ipsa privilegiorum constitutionum, statutorum, pactorum, &c. exeplaria ....* 2 Part. Frankfurt am Main 1662.

Conring, Hermann, *De importandis et exportandis.* Helmstedt 1665.

Conring, Hesmann, *Dissertatio politica de commerciis et mercatura.* Helmstedt 1666.

Hoffmann, J. F., *Blüender Wexels=Baum.* Franfurt am Main 1666.

Kuricke, Reinhold, *Jus maritimum Hanseaticum .... Accesserunt diatriba de*

assecurationibus: item variæ illustres quæstiones ad jus maritimum pertinentes. Hamburg 1667.

Kassel, J. D., *Das Interesse eines Gewissenhafften Kauffmanns.* 1674.

Savary, Jacques, *Der volkommene Kauff= und Handelsmann; oder, allgemeiner Unterricht alles, was zum Gewerb und Handlung allerhand beydes franzoesischer als auslaendischer Kauffwaren gehoert ....* Genève 1676. (この書は，J. サヴァリがその著『完全なる商人』*Le parfait negociant; ou instruction generale pour ce qui regarde le commerce de toute sorte de marchandises, tant de France, que de pays estrangers ....* 2 vol, Paris, 1675. を，アルサスローレン人およびスイス人のためにみずからドイツ訳したものであろうと，E. ウェーバーは推量している。参照，E. Weber, a. a. O., S. 13.)

Heydinger, J. J., *Kauff= und Handels=Leuten.* 1676.

Schmaltz, J. M., *Deutsche Helleuctende Kauff= und Handels=Spiegel.* Altenburg 1677.

Rademann, J., *Der Stadt Hamburg stets Blühender Wexel=Baum.* Hamburg 1698.

〔平井泰太郎著『経営学文献解説』，昭和7年，千倉書房刊に記載されている商業一般および簿記会計の文献名は，18世紀以前のドイツに関するかぎり（75-80頁），かなり多くの誤植ないし誤記が認められる。〕

(4) 前期カメラリストたちがその商業論を展開した著作は，およそ次の通りである。

Osse, M. von, *Politisches Testament An Herzogk Augustum churfürsten zu Sachssen.* 1556. (原文は草稿，1717年，クリスティーアン・トマジウスによって編集され，ハルレから刊行された。)

Obrecht, G., *Ein sondere Policey Ordnung, und Constitution, durch welche ein jeder Magistratus, vermittels besonderen angestalten Deputaten, jederzeit in seiner Regierung, eine gewisse Nachrichtung haben mag.* Strasbourg 1608.

derselbe, *Fünff underschiedliche Secreta Politica ....* Strasbourg 1617.

Becher, J. J., *Politischer Discurs von den eigentlichen Vrsachen / deß Auf= und Abnehmens / der Städt / Länder und Republicken / in speci, Wie ein Land Volckreich und Nahrhaft zu machen / und in eine rechte Societatem civilem zu bringen. Auch wird von dem Bauren=Handwercks und Kauffmannsstand / derer Handel und Wandel / item Von dem Monopolio, Polypolio und Propolio, von algemeinen Land=Magazinen / Niederlagen / Kaufbäusern / Montibus pietatis, Zucht= und Werckhäusern / Wechselbäncken und dergleichen / außfürlich gehandelt.* Frankfurt am Main 1668. (参照，小山田小七「ベッ

ヒャーの「政治論」」,「経済学雑誌」1939年8月号所収。）

derselbe, *Psychosophia oder Seelen=Weißheit / Wie nemlich ein jeder Mensch aus Betrachtung seiner Seelen selbst allein alle Wissenschafft und Weisheit gründlich und beständig erlangen können.* Frankfurt am Main 1678.

Hornigk (**Hörnigk**), **Phi. W.**, *Oesterreich Uber alles wann es nur will. Das ist: wohlmeinender Fuerschlag Wie mittelst einer wolbestellten Landes=Oeconomie, die Kayserliche Erbland in kurzem ueber alle andere Staat von Europa zu erheben / und mehr als einiger derselben / von denen andern Independent zu machen. Durch einen Liebhaber der Kayserl. Erbland Wolfahrt.* ohne Ort 1684. (anr. ed: Nürnberg 1684; 13 th ed..: *Herrn Johann von Horneks Bemerkungen ueber die oesterreichische Staatsoekonomie.* Ganz umgearbeitet und mit Anmerkungen versehen von B. F. Herrmann. Berlin 1784.）（参照，小山田小七「ホルニックの墺国至上論」,『大阪商大研究所年報』第10号，所収。）

〔**Schröder, W.**,〕 *Fuerstliche Schatz= und Rent=Cammer. Nebst einem Tractat vom Goldmachen.* Leipzig 1686.（参照，小山田小七「シュレーデルの王室金庫論」,『経済論叢』1937年5月号所収。）

Seckendorff, V. L. von, *Teutscher Fürsten=Stat / Oder: Gruendliche vnd kurze Beschreibung / Welcher gestalt Fürstenthuemer / Graff=vnd Herrschafften im Heiligen Römischen Reich Teutscher Nation, welche Landes, Fürstliche vnd Hohe Obrigkeitliche Regalia haben / von Rechts=vnd löblicher Gewohnheit wegen beschaffen zu seyn / Regieret / mit Ordnungen vnd Satzungen / Geheimen vnd Justitz Cantzeleyen / Consistoriis vnd andern hohen und niedern Gerichts= Instantien, Aemptern vnd Diensten / verfasset vnd versehen / auch wie deroselben Cammer= vnd Hoffsachen bestellt zu werden pflegen. Zu beliebigem Gebrauch vnd Nutz hoher Standspersonen / dero Jungen Herrschafften / Räthe vnd bedienten auch männiglichs / der bey Fürstlichen vnd dergleichen Höffen / Gerichten vnd Landschafften zu thun hat / nach Anleytung der Reichssatzungen vnd Gewonheiten / auch würcklicher Observantz abgefasset.* Franckfurth am Mayn 1656.

derselbe, *Christen = Stat, worinn von dem Christenthum an sich selbst und dessen Behauptung wider die Atheisten und dergleichen Leute, wie auch von der Verbesserung so wohl des Welt=als Geistlichen Standes nach dem Zweck des Christentums gehandelt wird.* Jena 1685.

(5) 後期カメラリストに属する J. G. ライプ，T. L. ラウ，J. B. ロール，S. P. ガッ

サー，J. Ch. ディートマールはその商業論を下記の著作のなかでそれそれ展開している。

Leib, J. G., *Erste [-Vierdte] Probe, wie ein Regent Land und Leute verbessern ... seine Gefälle und Einkommen, sonder Ruin derer Unterthanen ... vermehren, und sich dadurch in Macht und Ansehen setzen könne ....* 4 Tle. in 1 Bdl. Leipzig und Frankfurt am Main 1708.

[**Lau, T. L.**,] *Politische Gedancken: Welcher Gestalt Monarchen und Könige Republiquen und Fürsten: Nebst ihren Reichen, Ländern und Unterthanen; Durch eine leichte Methode Mächtig und Reich seyn oder werden können.* Frankfurt am Main 1717.

[**derselbe**,] *Auffrichtige Nachricht von dem jetzigen Etat des Finantz=Wesens der Respublica des Vereinigten Niederlandes.* Köln 1717.

[**derserbe**,] *Entwurff einer Wohl=eingerichteten Policey.* Frankfurt am Main 1717.

derselbe, *Aufrichtiger Vorschlag von gluecklicher, vortheilhafftiger, bestaendiger Einrichtung der Intraden und Einkuenfften: der Souverainen und ihrer Unterthanen; in welchem von Polizey= und Cammer=Nagocien und Steuer=sachen gehandelt wird ....* 4 Tle., Frankfurt am Main 1719.

Rohr, J. B., *Dissertatio de excolendo studio oeconomico, tam principum, quam privatorum.* Leipzig 1712.

derselbe, *Einleitung zur Staats=Klugheit. Oder: Vorstellung wie christliche und weise Regenten zur Befoerderung ihrer eigenen und ihres Landes Glueckseelichkeit ihre Unterthanen zu beherrschen pflegen.* Leipzig 1718.

Gasser, S. P., *Einleitung zu den Oeconomischen Politischen und Cameral=Wissenschaften, Worinnen fuer dieses mal die Oeconomico=Cameralia auch von den Domainen=oder Cammer= andern Guetern, deren Administration und Anschlaegen, so wol des Ackerbraues als anderer Pertinentien halber, samt den Regalien angezeigt und erlaeutet werden.* Halle 1729.

Dithmar, J. C., *Einleitung in die Oeconomische Policei= und Cameralwissenschaften, nebst Verzeichnis eines zu solchen Wissenschaften dienlichen Büchervorraths und ausführlichen Register.* Frankfurt an der Oder 1731.

なお，カメラリストの商業思想ないし経済思想については次の文献に詳しい。

Wilhelm Roscher, *Geschichte der National=Oekonomik in Deutschland.* München und Berlin. Zweite Auflage 1924 in Manuldruck.

Anton Tautscher, *Staatswirtschaftslehre der Kameralisten.* 1947.

吉田秀夫著『黎明期の経済学』，1936年，巌松堂書店刊。

(6) 加田哲二著『独逸経済思想史』，1931年，改造社刊，20頁。

(7) W. Roscher, a. a. O., S. 301.

(8) 増地庸治郎著，上掲書，37頁：桐田尚作著，上掲書，7頁。

(9) ニュールンベルクは14世紀以来，西ヨーロッパ随一の商業都市であり，「ニュールンベルク市民がいなければ，大市は開かれない」という諺さえ生まれた。ここには前期的資本のうちでも，商業資本が発達し，その機能分野として商品・貨幣取引が殊に著しく繁栄してイムホーフ家，ヴェルザー家などの前期的資本家を生みだしたが，アウグスブルクのフッガー家に匹敵するほどの巨大資本家は生まれなかった。

(10) W. Roscher, a. a. O., S. 301. Anmerkung 1 の記述による。しかし，佐々木吉郎氏はこの点に関して次のように記述されている。「氏〔マルペルガー〕は幼い時から軽快な性質で学問を好んでいた。が生地のギムナージウムにあがるに及んで，当時法律学者として有名であった Rittershufen のもとに法律学の研究を志した」。（佐々木吉郎著，上掲書，114頁。）

(11) Adolf Harnack, *Geschichte der Königlichen Preußischen Akademie der Wissenschaften.* Bd. 1, Leipzig 1900, S. 153.

(12) ドレスデンはアルベルト系ヴェッティナー家に属し，17世紀に同家がザクセン選挙侯の地位を得たため，その首府となった。ついで18世紀に入って，名君アウグスト一世およびアウグスト二世（フリードリヒ・アウグスト，在位1694–1733年，ポーランド王を兼ねる）が各種の文化施設を設け，ドイツ有数の都市となった。

(13) マルペルガーの伝記については，« *Leipziger Sammlungen* ». Bd. 2., S. 422 ff. (G. H. Zinke 執筆）およびマルペルガーの著作 « *Schlesischer Kauffmann* » の「読者にたいする序文」に詳しいと謂われる。

(14) W. Roscher, a. a. O., S. 301.

(15) E. Weber, a. a. O., S. 38.

(16) Carl Günter Ludovici, *Grundriss eines vollständigen Kauffmanns=Systems.* Omnitypiedruck der 2. Auflage von 1768. Mit einer Einleitung von Rudolf Seyffert, Stuttgart 1923, S. III.

(17) W. Roscher, a. a. O., S. 569.

(18) Josef Hellauer, *System der Welthandelslehre.* Bd. I, 1, 3. Auflage, 1920, S. 16.

(19) J. Löffelholz, a. a. O., S. 232.

(20) E. Weber, a. a. O., S. 37. Anmerkung 3, und S. 38.

(21) J. Löffelholz, a. a. O., S. 335, S. 271.

(22) E. Weber, a. a. O., S. 38 f.

(23) 参照，増地庸治郎著，上掲書，32頁。；佐々木吉郎著，上掲書，116頁。

3. P. J. マルペルガーの「商業アカデミー」設置の構想と商業教育運動の開始

以上，われわれは，P. J. マルペルガーの商業学研究の分野における「ドイツ最初の商業学者」としての活動や業績について概観してきた。しかし，彼のこうした研究上の活動や業績に劣らぬ，いや，むしろ彼のより重要な足跡は，史上初めて商人養成のための専門的な学校教育機関として「商業アカデミー」(Kauffmanns＝Academie) の設置を提議し，その具体的構想を提示したことであろう。[(1)] これは単にドイツのみならず，また世界の商業教育史上にまさしく画期的な意義をもつ出来事であった。われわれはここにこそ，商業の擁護者にして「ドイツ最初の商業学者」たる彼の見識の深さとその真面目を見出すのである。

マルペルガーは，商業について経験を積み，また学問的研究を重ねれば重ねるほど，国民経済において占める商業の役割と意義がいかに大きいかをますます深く認識するようになった。そしてそれとともに，ドイツの繁栄のために是非とも商業を振興させるべき必要性を痛感し始めた彼は，そこで，商業が一般に不振の状態にあり，しかも既述のように「商業蔑視」の風潮が朝野に支配的であったドイツの現状のもとでは，とりわけ，有為な商人の育成こそが商業を振興させるためのもっとも重要な前提であると考えるにいたった。その際，彼は慧眼にも，資本主義的生産様式の発展ならびに現今のいわゆる商業革命 (commercial revolution) の進展下にあっては，商業組織が大きく変化し，商業活動の規模がいよいよ拡大し複雑・多様化しつつあるため，もはや従来のような書き方＝計算学校 (Schreib＝und Rechnenschule) による単なる 3 R's 程度の基礎教育や徒弟修業による限られた経験をもってしては，刻々変化しつつある新しい状況に対処できる有為な商人はとうてい

育成され得ないことをいち早く看取した。そこからして，今後の商人は，専門的な学校機関において，商業々務の全般に関する学術的理論に基づく職業陶冶 (Berufsbildung) によってこれを養成する以外にない，との所信を彼は固めるにいたったのである。

マルペルガーはすでに1715年，ポーランド王国＝ザクセン選帝侯国枢密顧問官兼商業顧問官の資格でかかる所信を表明し，その具体的計画として「商業アカデミー」の設置を提案した。[2] そして，さらに1723年，« *Trifolium Mercantile Aureum, oder Dreyfaches Güldenes Klee=Blat der werthen Kauffmannschafft, bestehend: Erstens In des Autoris seinen wohlgemeynten Vorschlag von einer neu zu eröffnenden Kauffmanns=Academie. Zweitens Einem vollständigen Collegio über die Wissenschafft der Commercien, und Drittens Einer lehrreichen mechanischen Werck=Schul.* Dressden und Leipzig 1723 » なる著書を著わして，彼はその「新たに開設されるべき商業アカデミー」の構想の全貌を明らかにしたのである。[3]

マルペルガーはこの書において，商人養成を行なうべき学校教育機関としての「商業アカデミー」を論ずるに先立って，まずその序論として現在の教育制度そのものの全般的改革の必要を主張した。彼は，J. J. ベッヒャー (Johann Joachim Becher, 1635–82)，E. ヴァイゲル (Ehrhard Weigel, 1625–99) などとまったく同様，[4] とりわけ全教育制度を，また経済生活のためにも役立つよう改革すべきことを要求する。それというのも，マルペルガーは，国民経済の目標は国土住民の福祉と厚生にありとし，この目標達成の手段を「経済を指向した教育と陶冶」に見出していたからである。すなわち，彼は，当時の支配的な教会的学校観とはおよそ対蹠的に，青少年を魂の浄福と来世生活のためにではなく，現世における福祉と厚生，なかんずく経済活動のために何よりもまず教育し，かれらをしてその将来の実際生活における各自の任務にたいして準備せしめることに学校の本来の使命を認めたのである。したがって，彼はかかる立場から，全教育制度のなかでも，もっば

ら非実際的なラテン語文法の教授(ウンターリヒト)にのみ終始している，いわゆるトリヴィアール・シューレ (Trivialschule)[5] の改革がとりわけ必要であると主張する。

だが，こうした経済的見地からする教育制度の全般的改革と関連して，現行の学校監督制度 (Schulaufsicht) はきわめて不適当であるように彼には思われた。いうまでもなく，当時，教育制度の監督と指導は未だ教会の掌中に完全に握られていた。教会は依然として教育制度の内外の組織と内容のいっさいを〈ecclesiastica〉(教会的事項) として専管し独占していた[6]のである。したがって，そうした教会の教育支配が続くかぎり，学校において青少年を実際生活と経済活動とのために教育することは，とうてい望み得べくもなかった。それゆえに，マルペルガーは，教育制度にたいする監督・指導権を教会の手から剝奪し，国土の経済状態や経済生活の諸要求を正しく判断し得る人物に国家がこれを委ねることを強く要望したのである。彼はかように，学校における経済のための教育を可能ならしめるため，教育制度を「国家化」し，教育制度にたいする監督・指導権を経済人に委託するよう主張したのであるが，ただその際，この経済人に官吏の性格をもたせるべきであるとした。当時多くの重商主義者たちによって，国家経済の指導のために特別の中央行政官庁の設置が要求されていたことは周知の通りである。マルペルガーもまた，謂わば商務省 (Handelsministerium)[7] とも見做されるべき，広範囲の権限をもった「中央商業会議所」(Commerz=Collegium) の創設し，そして，教育制度にたいする監督と指導の権限をこの商業会議所に賦与するか，あるいは少なくとも，この商業会議所のメンバーをして教育制度にたいする監督と指導に当らせるよう提案する。そうすれば，トリヴィアール・シューレは，現在の形態を根本的に変革することなく，単に宗教教授を制限するだけで，青少年を実現生活と経済活動とのために教育することが可能となるであろう。ただし，マルペルガーは，トリヴィアール・シューレにおいては，経済的事物に関する教授はただ付随的にのみ行なわれるべきであって，

むしろトリヴィアール・シューレは青少年にたいして生活に必要な読み書き計算の基本的な能力を徹底的に陶冶することによって，もっとも善くその経済的任務を達成することができる，という見解をとった。

周知のように，「教育制度の国家化」（Verstaatlichung des Bildungswesens）は教育の「近代化」への1つの重要な動向と目されているが，教育および教育制度を警察的内務行政の一手段視する傾向の強かったドイツ，なかんずくプロイセンでは，「教育制度の国家化」は，18世紀の後半以降，全教育制度を司法省（Justizministerium），次いで内務省（Ministerium des Innen）に管掌させる方向で推進された。[8] それとは対照的に，マルペルガーが今ここで早くも全教育制度を謂わば商務省の管轄下に置くことによって「国家化」するよう提言したことは，まことに注目に値いする。またこの点にも，商業の擁護者にしてドイツ最初の商業学者たる彼の片鱗が現われている。

次いでマルペルガーは，いよいよその本論ともいうべき，商人のための専門的な学校制度としての「商業アカデミー」の構想を，異常な熱意をもって展開した。彼によれば，「商業アカデミー」（Kauffmanns＝Academie）は，従来その類例をみない独自の学校類型をなすべきである。それは一方では，在来の書き方＝計算学校以上のものでなければならないと同時に，また他方では手工業学校（Werck＝Schul）からも厳格に区別されるべきである。彼はその理由を次のように説明する。すなわち，„Es ist mit dem bloßen Rechnen, Schreiben und Buchhalten bey der Kauffmannschafft allein nicht ausgemacht, sondern diese edle Profesison erfordert noch was mehreres von ihren Liebhabern, nehmlich gewisse Stücke der Erfahrung und des Verstandes, ohne welche nach der Kauff＝Leut Redens＝Art der Verlust im Handel vor der Hand ist. Diese essentielle Stücke und requisita nun seynd wir eben der Meinung, daß sie in unserer neu eröffneten Kauffmanns＝Academie sollen angewiesen und tractiret wer-

den"[9] と。

さらにマルペルガーは，教科編成，学則および教授要目についてその計画を述べ，そして修業年限は2カ年ないし3カ年が妥当であると考えた。

教育課程に関しては，彼は簿記（Buchhaltung）にもっとも重要な位置を与えた。アカデミー入学者は，卒業後，商店や事務所などでただちに簿記の実務が行なえるまでになっていなければならない。また，計算（Rechnen）はもちろんのこと，書くこと（Schreiben）においても，少なくともトリヴィアール・シューレ程度の教授が与えられ，しかも，なかんずく速く美しく書く訓練がなされるべきである。しかし，「商業アカデミー」では，さらに進んで，とくに文法，正書法（Orthographie），文体論（Stillehre）が教授される必要があろう。また，このアカデミーに固有な教科としては，商業通信（Korrespondenz）と商業実践（Kontorarbeiten）のほかに，なお商業経営学（Handelsbetriebslehre），商業史（Handelsgeschichte），地理（Geographie），「アビー講読」（Lesen von Avisen）[10]，商品学（Warenkunde），力学（Mechanik），幾何学（Geometrie）および倫理学（Sittenlehre）などが開設されなければならない。語学に関しては，彼はラテン語以外に，イタリア語およびフランス語の両近代語の履習を要求した。これは恐らく，イタリアとフランスが当時のヨーロッパにおいて商業ならびにその学問的研究の先進地域であったことを考慮したためと思われる。

マルペルガーが「商業アカデミー」の教育目標としたところのものは，商人の「専門的職業人としての知識および技能」の陶冶であった。それゆえに，彼は商人たらんとする者が「将来その職務を十分遂行することのできるよう」上述の近代的諸学科を教育課程に採用し，将来の商人にその職務の全般にわたって学術的な理論的陶冶を施そうとしたのである。彼がここで提示した教育課程は，われわれがやがて考察するであろうところの，のちほどJ. G. ビュッシュ（Johann Georg Büsch, 1728–1800）によって1768年に創設された，「世界最初の本格的な商業学校」と称されるハンブルク商業学校

のそれに比して，いささかも遜色がない。いや，そればかりでなく，むしろ1898年以降に成立を見た商科大学（Handelshochschule）のそれにさえなぞらえられ得るのである。したがって，この点で次代を先取した彼の見識は高く評価されるべきであろう。

もちろん，マルペルガーといえども，商業に従事する者にとって所謂「商才」や「勘」(Vorschmack) の重要なことは決して否定しなかった。しかし，こうした「商才」や「勘」は，専門的な学校教育機関において商業の全般にわたって学術的な理論的陶冶を与えられたならば，いっそう容易に且つ合理的にその効力を発揮することができるであろう。これにひきかえ，従来の商家や商店などにおける徒弟修業では，おうおう親方 (Lehrmeister) が徒弟を教育するための時間や「忍耐心」をもちあわせていないばかりでなく，また「修業期間中のかかる徒弟の教育にまさしく必要にして不可欠な正しい教育方法 (Methode) を体得していない」[11]ので，徒弟の「商才」や「勘」を引き出し助長し得ない場合が多い。——マルペルガーはこのように批判する。

いうまでもなく，この「商業アカデミー」は，商人の養成・教育を行なうのがその主任務である。しかし，マルペルガーはこのアカデミーの上にさらに上構コース (Ausbau) を設けて，そこで商務官の養成を行なうことをも企図した。彼のこの企図はわれわれに奇異の意を抱かせないでもないが，しかしそれはカメラリスムス支配下の18世紀ドイツという事情を考慮に入れて理解されるべきであろう。「商業蔑視」の風潮が朝野に圧倒的な当時のドイツにあって，A. ガンスも指摘しているように[12]，国民経済において商業の果たす役割や意義について十分な認識をもち，商業の理論ならびに実際に通暁した官僚を養成することが，またドイツに商業を振興させるための最善の手段の1つであり，急務であることを，マルペルガーは深く確信していたのである。

マルペルガーは，上述のような「商業アカデミー」のほかに，〈Merkantilistisches Informations=Collegium〉についても語っている。これはすで

に実際に商業々務にたずさわっている商人のために設けられる一種の補習教育講座（Fortbildungskursus）であって，彼は前述の「中央商業会議所」の評議官をこの講座の講師に充てることを予定した。そうすることによって，実際の商業と商業行政と「商業アカデミー」との三者が有機的な連繋を保つことができると彼は考えた。この〈Merkantilistisches Informations=Collegium〉について，マルペルガーは次のように述べている。„Weil ich allbereit dieses Collegium in unterschiedlichen Reichs= Residenz= und Handelsstädten mit gutem Succes gehalten, also wird nichts mehr nothig seyn als die dabei gebrauchte Methode zur Nachahmung kund zu machen“[13] と。彼のこの記述からすれば，すでに当時，かかる商人のための補習教育講座が各地に開設されていたことが推定される。しかし，彼はこの〈Merkantilistisches Informations=Collegium〉に関して，これ以上何も述べていない。

またしばしば指摘されているように，マルペルガーは商業教育ならびに商業学研究の振興のために大学（Universität）をもその関連の中に引き入れ，大学にたいして独立の「商業学講座」（einen vollständigen Collegio über die Wissenschaft der Commercie）の開設を要求した[14]。この要求は，1727年プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世によるハルレ大学への経済，警察および官房学講座の開設に先立つこと4年であった。

以上が，その《*Terifolium Mercantile Aureum*》のなかで述べられた，「商業アカデミー」を中心とする，マルペルガーの商業教育制度の構想の大要である。このほかに，彼は同じこの書において，「手工業学校」（Werck=Schul）について論述しているが，ここではただ次のことを指摘するだけにとどめたい。すなわち，「ドイツ最初の実科学校（レアールシュユーレ）創設者」ゼムラー（Christoph Semler, 1669–1740）でさえも手工業学校は単クラスで行ない得ると考えた[15]が，マルペルガーはこれをさらに9つの専門学級，すなわち 1. 画家・彫刻家および銅版彫刻師，2. 船舶・造船工，3. 木細工師，4. 銅・真鍮工師，

5．金・銀細工師，6．絹織物匠，毛織物匠，亜麻織物匠およびビロード師，7．鞣皮師，8．機械・水車業者，9．化学者の各クラスに細分したということである。——

なお，このマルペルガーとほぼ同じ頃，上述したドイツ・カメラリストのJ. B. von ロールが1718年の著作《*Einleitung zur Staats=Klugheit. Oder: Vorstellung wie christlichen und weise Regenten zur Befoerderung ihrer eigenen und ihres Landes Glueckseelichkeit ihre Unterthanen zu beherrschen pflegen.* Leipzig 1718》のなかで，またT. L. ラウが1719年に著わしたその書《*Aufrichtiger Vorschlag von gluecklicher, vorhteilhaftiger, bestaendiger Einrichtung der Intraden und Einkuenfften: der Souverainen und ihrer Unterthanen; in welchem von Polizey=und Cammer=Negocien und Steuer=sachen gehandelt wird.* 4 Tle., Frankfurt am Main 1719》において，それぞれ商業教育の振興を説いている。しかし，それらはいずれも，R. バーケも指摘しているように[16]，その提案において何ら具体的な計画を提示していない。例えば，ロールはきわめて抽象的に次のように述べているだけである。„Es sind der Galantismus und Pedantismus zwey Laster, welche nach dem Unterschied der Örter und Leuten den Schulen insgemein anhängen ... die Schul = Monarchen führen ihre Untergebenen zu keinen reellen Dingen, sondern zu lauter Worten an.“[17] 〔Um dem abzuhelfen und auch der Praxis des Lebens durch Schulen zu dienen,〕„sollte billig von der hohen Landesobrigkeit anbefohlen werden, daß in den großen Städten ein der mercatorischen Sachen erfahrener Mann junge Leute in allerhand Dingen, welche zum Commercien=Wesen und Handel und Wandel gehören, unterrichtet.“ 〔Dieser Mann soll dann weiter〕„die meisten Waaren, die in dem Lande fabriciret oder doch verkauffet würden, in natura und nach einigen Proben zeigen ... ihnen darbey den Ort sagen, wo solche Waaren und Materialien wüchsen und herkämen, die Zeit und den Preiß ihres Ein=

und Verkauffs und wie es aus der ersten, andern und dritten Hand verkaufft würde, wie den Preiβ davon different wäre ....“[18] 同様のことは，無名の一ドイツ人によって1733年[19]にフランス語で著わされた著作 «*Traité de la richesse des princes et de leurs Etats: et des moyens simples et naturels pour y parvenir par M. C. C. d. P. d. B. Allemand.* Paris, 1733» についてもいい得るであろう。しかし，その提言はロールやラウの場合に比べればやや具体的である。すなわち，ここでは，商業教育制度の創設について，„Il faut que le prince les en garantisse en établissant des Ecoles pour apprendre tous les mystères du commerce interieur et etranger—. Pour avoir toujours d'habiles marchands, il faut avoir des pépinières pour en élever.“ と述べたのち，この新しい教育制度を次のように高く評価している[20]。„Cependant en trouveroit peutêtre ridicule, si je disois qu'il vaudroit mieux pour l'Etat, qu'il eût a chaque place de Professeur de poësie un Professeur de commerce.“ と。

したがって，マルペルガーの「商業アカデミー」設置の提案とその構想は，Br. ツィーガーと B. ペンドルフとが正当に評価しているように[21]，たんにドイツのみならず，広くヨーロッパにおける商業教育運動の出発点と見做されるべきであろう。事実，ルドヴィッチ（Carl Günther Ludovici, 1707–1778）は，その著名な著作 «*Grundriss eines vollständigen Kauffmanns=System.* 2. Auflage, Leipzig 1768» の序論第8節において，マルペルガーの提案以前の商人のための書き方＝計算学校を単に〈Schulen〉と呼び，以後の商業教育制度を〈Kauffmannsakademie〉と称することによって両者を截然と区別し，マルペルガーを新しい商業教育制度の理念的創始者と見做している[22]。もちろん，マルペルガーの商業教育制度の設置に関する提案とその偉大な構想は，残念ながら彼の存命中には実現を見るにいたらなかった。とはいえ，彼によってともされた烽火は，その死後，曠野を燃え頻る燎火と化したのである。1759年リスボン（ポルトガル）に商業学校が創設された

のを嚆矢として，1767年パリ（フランス），1778年モスクワ（ロシア），1779年ゲール（ハンガリー），1785年エーリンゲン（スエーデン），1788年ツールーズ（フランス），1789年マンチェスター（イギリス）など陸続と設立されて行く。[23] またドイツでは1764年に創設されたハナウのそれを始めとして，18世紀の後半だけでも約20校以上の商業学校が設置され，商業教育制度の本格的成立をみるにいたったが，このことについては次稿以下において考察を試みる予定である。しかしながら，マルペルガーの商業教育制度設置の提唱とその構想は，単にこうした商業教育運動の導火線となったばかりではない。そしてそれがまた，いみじくも E. ウェーバーが指摘しているように，[24] 18世紀における商業学の広汎な発展，なかんずく経営経済学の創成にも直接貢献したことも，決して看過されてはならないであろう。

〔未完〕

注

(1) 商業教育史上におけるマルペルガーの業績ならびに意義については，とくに次の文献に詳しい。

Bruno Zieger, *Ein sächsischer Merkantilist über Handelsschulen und handelswissenschaftlichen Abteilungen an Universität.* Leipzig 1889.

derselbe, *Der Handelsschulgedanke in Kursachsen im achtzehnten Jahrhundert.* In: Litteratur über das gesamte kaufmännische Unterrichtswesen sowie über die seit 1895 erschienen Lehrbücher und Lehrmittel für kaufmännische Unterrichtsanstalten. herg. von B. Zieger, Bd. 14. 1900.

(2) Rulf Berke, *Überblick über die Geschichte der kaufmännischen Schulen.* In: Handbuch für das Berufsschulwesen. hersg. von F. Blättner, L. Kien, O. Monsheimer, S. Thyssen. Heidelberg 1960. S. 140. この点に関して，A. ガンスは，マルペルガーが商業教育制度として「商業アカデミー」の設置を最初に提案したのは，1715年に著わした《*Wohl unterweisener Kauffmanns=Junge und Getreuer und Geliebter Handelsdiener.* Nürnberg 1715》なる著作においてであったと見ている（August Gans, *Das ökonomische Motiv in der preußischen Pädagogik des achtzehnten Jahrhunderts.* Halle 1930, S. 47, Anmerkung 1）。これにたいして，E. ウェーバーの記述するところでは，それは1714年の書《*So*

nöthig als nützliche Fragen über die Kauffmannschafft» においてであるとされている。(E. Weber, a. a. O., S. 42)

(3) Carl Günther Ludovici, *Grundriss eines vollständigen Kauffmanns=Systems.* Omnitypiedruck der 2. Auflage von 1768. Stuttgart 1932. S. 24.: A. Gans, a. a. O., S. 45 ff.: R. Berke, a. a. O., S. 140. u. a.

(4) 例えば，E. ヴァイゲルは1689年に著したその書 «*Extractio radicis, oder Wurtzl=Zug des so schlechten Christen=Staats*» のなかで，当時のドイツの学校を次の如く批判している。「手工業，技芸，商業，あるいは家政を学ぶべきはずの少年たちが学校から何等実際的な知識を得てこないで，かえって使いふるされた文法ばかりを得ているということは，学校の有害な欠陥である。それゆえに，ドイツはまた，未熟な手工業者が非常に多く，真の技芸家がきわめて少ないようになる。青少年にその母国語で実際的知識を授けている外国では技芸が繁栄し，手工業，マニュファクチュア，その他の商業が遙かによい状態にある。実にドイツを貧困にし，外国を富裕ならしめている原因はここに存する」と。参照，Fritz Blättner, *Vom Ursprung der realistischen Schulen.* In: Die Erziehung. 11. Jahrgang / Heft 3. Leipzig 1935. S. 130 f.

(5) いわゆるトリヴィアール・シューレ (Trivialschule) と呼ばれているものには，歴史的に2つの形態がある。その1つは，18世紀後半から19世紀の中葉まで南ドイツにおいて単級の下級学校ないし民衆学校をトリヴィアール・シューレと称した。たとえば，フリードリヒ大王が1765年に制定した「カトリック地方学事通則」やマリア・テレジアが1774年に公布した「オーストリア一般学校規程」がそうである。しかし，この呼称は19世紀の中葉頃から漸次用いられなくなり，「フォルクスシューレ」あるいは「エレメンタール・シューレ」がこれに代わるようになった。他の1つは，ラテン語学校の第1学年から第3学年まで，つまり文法，弁証法，修辞学の3学 (Trivium) を学ぶ「基礎教育」課程を謂い，ここではこの後者を指している。中世以来，ドイツの富裕な商人はこのトリヴィアール・シューレで教育を受けていた。例えばリューベックの商人 H. ブロッケスはその手記の中で，この点について次のように述べている。„Ich bin erstlich in die teutsche Schule gangen auf dem Kirchhofe oben der Fischstraßen zu einem Meister der lahm war, also daß er auf Krücken ging. Sohald ich ins achte Jahr kam, hielt mir mein Vater einen Pädagogen und setzte mich nebst meinem Bruder Cordt in die lateinische Schule, allwo ich sobalt in quintam classem kam. In meiner Jugend hatte ich nicht das schlimmste, auch nicht das beste ingenium, denn Viele meiner Mitgesellen von einem Alter thaten es mir etwas zuvor ... aber ich kam auch allgemach hernacher.

Ao 1583 kam ich in primam classem, allwo wir gute Exercitia hatten und war ich stark vom Rector Pancratius angehalten. Dies war mir etwas schädlich und verhinderlich in meinen Studiis, daβ wir nicht beständige Pädagogen hatten, indem der Vater sich oft damit verneuerte, also daβ ich nicht in Einer Übung und Exercittis blieb ....“ (Heinz Kelbert, *Die Berufsbildung der deutschen Kaufleute im Mittelalter.* Berlin 1956, S. 23. の引用文に拠る。）17世紀および18世紀の，ドイツでは，当時擡頭しつつあったブルジョアジーによって，トリヴィアール・シューレないしラテン語学校は，その教育の非実際性を痛烈に批判され，実科学校（Realschule）や市民学校（Bürgerschule）への改造案が数多く提起された。参照，拙稿「資本制生産と国民教育」II（小樽商科大学『商学対究』第12巻第3号，1961年11月）59頁以下。なお，この問題に関しては特に次の文献に詳しい。

Alfred Heubaum, *Geschichte des Deutschen Bildungswesens seit die Mitte des siebzehnten Jahrhunderts.* Erster Band. Berlin 1905. とくに82頁以下。

Heinrich=Wilhelm Brandau, *Die mittlere Bildung in Deutschland. Historisch=systematische Untersuchung einiger ihrer Probleme.* Weinheim a.d. und Berlin 1959.

Helmut König, *Zur Geschichte der Nationalerzuhung in Deulschland im letzten Drittel des 18. Jahrhunderts.* Monumenta Paedagogica, Bd. 1. Berlin 1960.

Fritz Blättner, *Das Gymnasium.* Heiderberg 1960. とくに51頁以下。

(6) この点に関しては，Wilhehm Kahl, *Zur Geschichte der Schulaufsicht.* Leipzig 1913. に詳しい。またごく最近，Enno Fooken, *Die geistliche Schulaufsicht und ihre Kritiker im 18. Jahrhundert.* Wiesbaden=Dotzheim 1966. という注目すべき研究書が公刊された。

(7) 因みに，官僚制国家プロイセンで，商業のための特別省が設置されたのは，1741年のことであった。参照，上山安敏著『ドイツ官僚制成立論』，昭和36年，有斐閣刊，205頁。

(8) Eduard Spranger, *Der Zusammenhang von Politik und Pädagogik in der Neuzeit.* In: Die Deutsche Schule. XVIII. Jahrgang, Leipzig und Berlin 1914. S. 363–366. なお，内務省から独立して文部省（Ministerium der geistlichen, Unterrichts=und Medizinal=Angelegenheiten）が新たに設置されたのは，1817年11月3日である。

(9) A. Gans, a. a. O., S. 47 f. の引用文に拠る。

(10) マルペルガーは明らかに，これを新聞（Zeitung）の講読の意味で述べている。

(11) R. Berke, a. a. O., S. 141.

(12) A. Gans, a. a. O., S. 48.

(13) ditto, S. 49. の引用文に拠る。

(14) 邦語文献でこの点にふれているのは，筆者の知るかぎりでは，佐々木吉郎著，上掲書だけであって，その115頁に「マルペルガー氏は大学における商業学の講義の必要を最初に主張した人とせられている」と述べられている。

(15) 1705年の提言 « *Nützliche Vorschläge von Auffrichtung einer mathematischen Handwercks=Schulen bey der Stadt Halle / in welcher Allen denenjenigen Knaben / welche Handwercker lernen sollen / ein Jahre vorher / ehe sie aufs Handwerck kommen / aus der Mathematic, Der Circul und Lineal, die Bewegungs=Kunst / und alle Arten derer Gewichte / Maaße und Müntzen; Und aus denen mechanischen Künsten / Alle Arten derer Materialien / so die Handwercker verarbeiten / in natura für Augen gelegt und erkläret; Auch die bey der Stadt verfertigte Meister=Stücke gezeiget werden; alles aus dem Absehen, damit die Wunder der Allmacht und Weißheit Gottes desto desto beßer erkannt und gepreiset, die Stadt mit guten Künstlern und geschickten Arbeitern erfüllet, und die gemeine Jugend durch die nützliche Wissenschaft praepariret werde, bey ihrer künftigen Handthierung desto beßer Gott und ihren Nechsten zu dienen.* 〔1705〕» を参照。なお，ゼムラーの手工業学校論ならびに彼が1708年に創設し，1738に再興した「数学・機械実科学校」(Mathematische und Mechanisehe Realschule) については次の文献に詳しい。

Paul Barth, *Die Geschichte der Erziehung in soziologischer und geistesgeschichtlicher Beleuchtung.* Fünfte und sechste, wiederum durchgesehene Auflage, Leipzig 1925. S. 421 ff.

A. Gans. a. a. O., S. 6–11.

Oskar Simon, *Die Fachbildung des preußische Gewerbe=und Handelsstandes im 18. und 19. Jahrhundert.* Berlin 1902. S. 617 ff.

Nikolaus Maassen, *Quellen zur Geschichte der Mittel=und Realschulpädagogik.* 1. Band, Hannover 1959. S. 25–30.

(16) R. Berke, a. a. O., S. 140.

(17) J. B. von Rohr, a. a. O., S. 371.

(18) ditto, S. 941.

(19) R. バーケはこの書を「1753年，パリ発行，しかしすでに1722年2月28日に発行を許可されていた」と記述している。(R. Berke, a. a. O., S. 140.)

(20) A. Gans, a. a. O., S. 45. の引用文に拠る。

(21) Bruno Zieger, *Die Handelsschulen.* In : Encyklopädisches Handbuch der

Pädagogik, hersg. von W. Rein, 2. Auflage, 4. Bd. Langensalza 1906, S. 2.; Balduin Penndorf, *Geschichte des Kaufmännischen Unterrichtswesen.* In: Handbuch des Kaufmännischen Unterrichtswesen, 1. Bd., Leipzig 1916, S. 133. なお，在来の邦語文献のなかで，マルペルガーの商業教育制度論に言及しているのは，筆者の知るかぎりでは，上述の佐々木吉郎著，上掲書（注14を参照）のほか，増地庸治郎著『経営経済学序論』，大正15年，同文館刊（32頁および264頁）と桐田尚作著，上掲書（7頁）とがあるだけであって，戸田正志著『商業教育総論』，昭和12年，商業教育研究会刊：藤本幸太郎「商業の教育」（岩波講座『教育科学』第9冊，昭和7年，岩波書店刊，所収）：奥村恒夫著『商業教科教育法』増訂版，昭和35年，大明堂刊などはドイツにおける商業教育の発達を論じながら，マルペルガーについてはその名前すらも挙げていない。

(22) C. G. Ludovici, a. a. O., S. 24 f.

(23) Alfred Kühne, *Handbuch für das Berufs= und Fachschulwesen.* 1. Auflage, Leipzig 1922, S. 9: 渡辺鉄蔵「独逸ノ高等商業学校」（『国家学会雑誌』第28巻第2号，大正3年2月，有斐閣雑誌店刊，所収）176頁。18世紀の後半に設立されたこれらの商業学校は，概して学者および実業界の指導者の養成を目的としていたのであり，したがって今日の普通商業教育というよりも，むしろ当時における高等商業教育に該当したと見做すべきであろう。この点で，19世紀に普及を見た商業学校制度とはその趣を異にする。とくにドイツの場合がそうであった。その理由について，増地博士は商業学校の目的および組織が変更したことを挙げ，次のように説明しておられる。「商業学校は1831年にライプチッヒに最初の公立商業学校 Öffentliche Handelslehranstalt が創立せられて以来，続々と成立を見たけれども，これがために『商業学』は却て衰えた。これ一見奇異なる現象の如くであるが事実であった。即ちルドヴィチ，ロイクス等の建設せる『商業学』は学究的であり，実際的なる商業学校の教科としては余りにも高級であった。故に商業学校においてはこの『商業学』を棄ててビュッシュの先例に従って国民経済的意義における商業を理解せしめることに努め，また実務問題，即ちロイクスが Contorwissenschaft と名付けたものの実習を主とした」（増地庸治郎著，上掲書，46頁）。

(24) E. Weber, a. a. O., S. 42. 原文を正確に引用すれば次の通りである。„Als Vater dieser Gedanken〔Handelsschulgedanken〕hat Marperger auch mittelbar einen Anteil an der weiteren Pflege und Entwickelung der Handelsfächer, besonders an der Schaffung der Handelsbetriebslehre des 18. Jahrhunderts, der « Handungswissenschaft »“.